



Title	ライトとヴォーリズ : アメリカ住宅建築の流を背景として
Author(s)	山形, 政昭
Citation	デザイン理論. 2016, 67, p. 126-127
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56275
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ライトとヴォーリズ

— アメリカ住宅建築の流を背景として —

山形政昭／大阪芸術大学芸術学部建築学科

本稿は2015年の大会において、水上氏の基調講演を踏まえてのシンポジウム「ライト式建築の諸相」におけるコメントとして述べた内容の報告である。

F. L. ライトは1890年、シカゴ郊外に建てた自邸を出発点に住宅建築家として活躍し、東京の帝国ホテル等を経た20世紀前半期において、すでに米国における巨匠と目されていた建築家である。一方1905年、24歳で来日した W. M. ヴォーリズは、商業学校教員解職後の1908年に建築設計を業としての自立を目指し、近江八幡というローカルタウンを拠点とした素人建築家としての出発であった。

よってここで、独自のスタイルを標榜した「巨匠」と、母国のアメリカ建築を範としたヴォーリズの活動を共に論じ得るか、かなり不安を覚える報告であるが、1920年代以降の我国において、夫々に特色あるアメリカ建築の移入者として並ぶ活動があり、両者の作例を取り上げて比較検討を試みると、両者の関連性が見えてくる。そして19世紀末より20世紀初頭、アメリカ住宅の背景にある住宅思想や表現における種々の関連についても、一端を述べた。

ライト自邸（1890年）と吉田邸（ヴォーリズ、1911年設計）

ライト自邸は氏の建築活動のはじめに位置するもので、三角の大きな妻面、出入りのある1階の壁面構成など種々の造形的特色をもっている。一方、吉田邸はヴォーリズ初期の米国式住宅でスレートの腰折れ屋根とクラシカルなポーチによってコロニアルスタイル

と目される住宅である。付け加えると、オーソドックスな様式をとりつつも、シンプルな総2階の箱形で、モルタルの外壁と窓回りの簡素なディテールにも特色がある。

この両住宅の平面計画に注目すると、中央に暖炉を置き、周囲に居間、食堂、台所を配置するプランの類似性に気づく。こうした住宅計画は、当時アメリカで発展した住居学 Home Science の推奨する機能に応じた合理的な計画であり、家庭生活を第一とする実用と、ピューリタニズムにかなう簡素さ Simplicity を備えたものとして注目されたものであった。

またライト自邸の外観には、従来から指摘されるように米国のシングルスタイルおよびスティックスタイルにおける下見板などの資材と特徴的な形態が見て取れる。同様にヴォーリズにおいても初期作品にはシングルスの活用例があり、そうしたアメリカ住宅様式の応用と、当時普及したバルーン構造などが基本的な手法であった。また規格化した木構造の特色を生かした角型窓、2連窓、3連窓による合理的な木造デザインとも見られるが、ライトの初期住宅においても同様といえよう。

タリアセンと軽井沢

ライトは1911年より自然豊かなイリノイ州スプリングフィールドにタリアセンと称した広大な活動拠点を設け、自然と一体化した建築環境の下で、「自然」を源泉とする独自の建築思想を深めたことが知られている。そうした自然に対する憧憬と潜心はヴォーリズにおいても知られることであり、その実践として1912年に始める軽井沢での拠点作りと活動が

あった。そこでは1910～20年代においてはミス・カフマン・コテージ（1915年）など米国人宣教師達のコテージを数々建てており、それが避暑地軽井沢の一つの建築スタイルとなったと見られている。

それらのインテリアでは、荒い石積み暖炉や簡素な造り付け家具、そしてクラフツ・デザインといえる木製家具の類が用いられていた。

こうしたインテリアと家具デザインは同時代のアメリカで登場していたクラフツ家具やミッション家具と見なせるものであり、例えばG. スティックリーらによるクラフツマン・ワークショップ家具との類似性の濃いものである。クラフツ家具の特色は、シンプルな形態とやや重い木質感、そしてピューリタニズムの精神性と合理性をもつものとされるのであり、周知のようにライトの創作家具にもつながるものがある。

ところで、ライトのタリアセンでは1930年代に入るとタリアセン・フェローシップと呼ばれた活動があり、広大な自然環境の下での独自の建築教育、そして自然主義的プロテストантиズムといわれるユニテリアニズムの性格をもつ共同体が目指されていたといわれている。それを一種のユートピア共同体と考えると、ヴォーリズが社会的実験として組織したという近江ミッション、近江兄弟社 Omi Brotherhood の活動との類似性を考えることも可能かもしれない。

ユーソニアン・ハウスについて

ライトは1930年代に入るとコンクリート造やコンクリートブロックによる独自の創作を展開する一方、ユーソニアン・ハウスと称する木造によるコンパクトでローコストな住宅設計に取り組み、板壁、フラットな天井、建具等、建築部位の標準化によって、相当数の

中流住宅設計に取り組んだことが知られている。

そうした初期の作例であるジェイコブズ邸（1937年）をみると、伸びやかで流動的な屋内外の住宅デザインはライトならではのものであるが、水平に目地を通す横板張りの外壁、フラットな板張り天井など平明であり、モジュールに従うプランニング、ガラス建具による壁面と造り付け家具などモダニズムの表現が明瞭となっている。

この時期におけるヴォーリズの住宅例の一つに旧小寺家別荘（六甲山荘 1934年）がある。六甲山上の緑豊かな敷地にあり、接道よりかなり奥まったところに建つ。こじんまりとした玄関ポーチより屋内に進むと、ガラス戸を建てまわした広間に入る。小梁を格子状に組んだ平天井であり、視線は自然と屋外に向けられる。加えて広間の一角には暖炉のコーナーがあり、造り付けの書棚と、ベンチが備えられており、クラフツ・デザインによる木と石積みによる心地よいスペースとなっている。屋根は緩い寄棟であり、深い軒が水平に伸び、広間に付設する広いテラスと共に外部空間を生きづかせている。

このように小寺家別荘はライトのジェイコブズ邸に見るような、リズムカルな線と面の構成には及ぶ所は無いものの、平屋建による水平な軒の広がり、モジュールによる合理的な計画、木地を基本とした仕上げなど共通する手法が見いだせる。

まとめ

ライトとヴォーリズの住宅に関して、当時の米国住宅の流れと、日本における浸透を考えると、米国での住居学の発展を下とした合理的計画性、自然志向とクラフツのデザイン、中流階層に供された規格化した設計の試みなど、種々共通することが指摘できよう。